

第九席 地獄極樂ごうでもよい

一 今回は話の趣意として一念と後念との事を詳しく話したい。何故かなら、あんな方では一念の信心も後念の喜びと云ふものも一緒になつて居る。助け給への一念と云ふものゝ分らずに困つて居る人が多いと思ふ。一念と後念とが一緒になつて居るから、後念の喜びを信心として居るものがある。參らせて貰ふと安心し落着いては居るけれども、愈となると何にもないが、掴まへ所が無いが、聞こ

往生の安心の
後念の喜び

えたら斯うでも無からう、ごうかしつかりなるだらう、これが一念と後念との分界が分らぬ、後念の喜びと信心との分界が分らぬから斯うなる。こゝをはつきりして置かんならん。何時でも、往生の安心は後念の喜び、一念は往生の安心で無い。引受けると云ふ彌陀の御親切に安心する。御淨土に參る事に安心する事でない、參らせて貰ふと夜明けすると違ふ。參られぬ其機を引受けるといふ親切に着く。それが助け給への一念、それは一おもひに片が附く。一念は往生に安心するで無い、引受けるといふ親切に安心する。後念相續は參らせて貰ふ事の喜び、之は棺桶に足を入れる迄ついで行く。欲生相續心と云ふ。一念と云ふは、御淨土に安心するで無い、安心出來ぬ方を出して引受けると云ふ親切に安心する。それが助け給への一念。

一念の方は參られる機を出さぬ、參られぬ機を出し、墮ちる機を出し、助からぬ機を出し、命懸けでも引受けてやらうと云ふ親切に落着く。其時は往生はこつ

こつち
は持ち
ぬ

ちは持たぬ、彌陀にまかせて置いて、引受手に落着く。それがたのむ一念。此時に出すものはぎまつて居る。參られませぬ、助かりませぬ、これだけ出せばよい、持たぬか、參られませぬ、助かり相にござりませぬ、墮ち相なよりござりませぬ。これを出す。これを出さにやたのむ一念は出ぬ。こゝの話が違ふから、違ふ所をはつきり聞いて呉れ。

一念と云ふ方はごへ來るかと云ふと、參られませぬ、助かり相に思はれませぬ、墮ち相なよりござりませぬ、こゝ、引受けるといふ親切が屈くなり、往生は治定。此時は往生は持たぬ、往生は引受手に渡して、其引受手に安心するのぢやぞ。お前さん等餘り仰山聞くものだから、ゴチャ／＼になつてごをおさへてよいか分らぬやうになる。一つの茶碗の中に御馳走を皆ぶち込んだやうになつてしまふ。

信心の
土産持
たす

二 一念の時は、雜行棄て、後生助け給へとたのむ一念、阿彌陀さんのまごころ

地獄桶樂ごうでもよい

を私の胸に貫ふ一念、参られませんが、墮ち相なよりござりませぬ、今ど踏み出しや眞つ暗がり、これより外には何にもござりませぬ、どうしようも行け。そこで阿彌陀様の勅命ぢや。

参れんと分つたら、そこ受持たう、墮ちると知つたらそこ引受ける。助からんと分つたら助かる世話は此彌陀が受合ふ。たゞ受持つぢや無い、正覺の命懸けても俺が受持つ。こゝで落着けるぢや無いか、外を聞くのぢやない、こゝを聞くのぢや。

信心の御土産、疑晴れたの御土産、彌陀たのむのお土産はやめて置きなさい。生れついたり生地の儘、ありべがかりの此儘、墮ちる實機の此まゝを引受けてやらう。これで樂ぢやらう。其時に出すものは何だ、参られませぬ。助かり相にはござりませぬ、墮ち相なよりござりませぬ。何と、心をおさへても、心をおさへりやおさへる程今日の日暮しなら欲しい憎い可愛い、後生となつたら眞暗が

り、これより外には持ちものはござりませぬ。それでよし。

任
が
解
や
ら
う
ぬ

三 そなたの方は其機が目について困るぢやらうが、彌陀は、それを知らん彌陀ぢやと思ふて呉れるな、其機が大事の〱五劫の思案の相手になつた。

然らばこゝはごうなりませう、と云つたら、参る事も俺が受持つ、墮ちん事も俺が受持つ、助かる事も俺が受持つ、分らぬ所は、此彌陀が受持つてやるで、俺にまかせ。まかせるとはまかせると、まかせようが分らぬと来た。イヤな奴は渡すは渡すが渡しやうが分らぬ。あいつ、邪魔になつて〱渡したうて〱こたへられぬが、渡しやうが分らぬ、どうしよう。言ひたからうが、みんな言ひたいやうな顔をして居るから私が言つてやる。

眞宗で、彌陀たのむといふのは、まかせたのみとすがりだのみ。願ひだのみでない、求めたのみでない。

一すじにかの阿彌陀佛の御袖にひしとすがりまゐらすのおもひをなして、

眞宗のはまかせだのみ、すがりだのみときままつて居るが、まかせやうが分りませぬ、受持つて貰ひやうが分りませぬといふ。受持たせやうはどうすることも心配は無い、心配は無いと云つても分りませぬ。それは、それからさきは、此彌陀が護つて離れはせんで、墮ちたら此彌陀も共に焰の中までも行く、正覺の命懸けても俺が受持つ程に、そなたの心の落着は我にまかせよ、そなたの心の据はりは、離れぬ親をば當にするばかり、附添ふ彌陀を力にするばかり、親と一緒なら来る氣になるばかり。親が命懸けでも離れんと云ふ親切に得心をせよ、我を頼めよ、我にまかせよ、まかせせる心の落着は、渡した心の据はりは、受持手を力にする、それがまかせだのみ、すがりだのみと云ふ事、彌陀をたのむと云ふことはどういふ事か、まかせた心の落着は、墮ちんの世話と、參るの世話と助かる世話は親に渡した、渡した心の落着は受持手をたよりにする。

何にも知らん、難しい事は知らんで、と云ふ人があるが、あれは嘘ぢや。分る

離れぬ
彌陀を
當てて
よせ

解つた
上で一
慈悲な
れつ

迄は、聞いてく、知つてく知りぬいて、分つてしまつたら何んにも要らん、御慈悲一つで、相續が出来る。御慈悲一つになる迄は仰山聞いて分らなげりやいかぬ。却々御慈悲一つになれるものでない。分つた以上は御慈悲一つで何んにも要らぬ、けれども分るまでは、御慈悲一つになるまではちやんとものが分らぬはいかぬ。そこをよく心得んならぬ。規則だつた事だけは私が話をしたい。

一念の方は往生に安心するので無い、どう安心するか、引受手に安心する、引受手の親切に安心する、それが助け給への一念。後念相續は、何ん時命終つても參らせてお呉れる。助けてお呉れる、大丈夫々々、何ん時でもくど喜ぶ。一念は往生を握らん、彌陀にまかせて置いて受持手に安心する。たつた一おもひ。後念相續はおもひが澤山あるから多念。參らせてお呉れるに間違ひないと落着く、之は後念、一念には安心の出来ぬ方を出す。落着けん方を出す。さうして引受けると云ふ阿彌陀様を力にする。

そこでお前さん等、此御座にも煩悶してござる人があるが、何んぼ聞いてもく安ん心せん、落着けん、困つたくくそれは駄目。其煩悶は自力、五十二段も違ふ御浄土へ向くからいかぬ。命終つたら御浄土でない、死んだら佛でない。命終らぬたつた今、俺が受持つて墮ちん身の上に決めてやらう、そこに落着く、其筋が違つて居るから困らんならん。今一念に持つて來るものは、安心出來ませぬ、落着けません、夜明けが出來ませぬ、それでヨシく、それで結構々々。どうしませう。安心出來たら勝手に、大丈夫になつたら自分で、なれんなら、受持つ親が待ち兼ねて居るから、俺にまかせたらどうぢや。まだ不足らしい顔をして居るハ、ハ、ハ、ハ。

初一念
は彌陀
の攝取
めたの

四 一念と後念をはつきりせんならぬ。一念は往生でない、攝取の彌陀をたのみ。命懸けでも離れんと云ふ彌陀をたのみ。往生は向ふへ持たす。お前さんは自分でお持ち遊ばすからいかぬ。阿彌陀様に持たせて置く。俺の大事な後生を一遍返し

なさい。あなたが引受けて御呉れる、助けてお呉れる、なに一遍考へて見るわ、今夜でも、どうぢや、いかんく、やつたりとつたり、渡した時もあり取戻す時もある、はてしがつくまいが。

そこで機の深心を立てるのはこゝにある。我機はわるきいたづら者、地獄ならでは行方の無いものと深信する。我手ではかなはぬと承知が行かねば引受ける彌陀はたのめんぞよ。

阿彌陀様が引受けてお呉れる、助けてお呉れるは分つて居る。大丈夫の本願も分つて居る、間違はさんの御慈悲も分つて居る。どうぢや、愈今行かんならんとなると、直ぐ取り戻して自分だけお出でなさる。そこは承知して居る。分つて居る、けれども今になると、阿彌陀様、あつちへ向いてお出でなさい、と云ふわ。さうして、まだいかんくど始めるわ。何遍やつてもそれはいかん等、阿彌陀様ぬきぢやもの。でも、私の大事な後生だから一遍やつて見ますね。今夜でも、

かまだ
かんい

出掛けにならんが——と直きに一人で御行き遊ばす。今夜でも出掛けにやならんが——とやる時は引受ける彌陀をのけた時ちやぞ。

往生は私の手を放つて攝取の彌陀をたのみ、往生は此方に持たんのちやぞ。

阿彌陀さんに引受けて貰つたら此方に持たぬ。愈となつたらごうちや。

南無といふは衆生が阿彌陀如来に向ひ奉りて、雜行捨て、後生助け給へ

ごたのむ機の方なり。

ごたが分らんものだからいかぬ。

今日が此機に用事なし
只今は、行ける行ける心の心配も、助かる助からんの、心配も墮ちる墮ちんの心配も、親が命懸けでも引受けるごあるからは、今日から此機には、更に關係ないのだな、斯う行け。

それを、阿彌陀さん向う向いて、一返やりますわ、今夜でも……ごやつたら阿彌陀さんをのけて凡夫様が一人になつた事ちやぞ。見えもせにや考へられもせ

ぬ、見る事も思ふ事も出来ぬお浄土に一人で御行き遊ばす、お前さん等はえらいお方ばかりちや、後の方から光明が出て居るは、危ない話ちや。

阿彌陀様の本願と云ふものはさうでない。自分で行くのでない。御浄土に参る事も、佛になる事も助かるごもかなはぬ、後生となつたら行き場持たず、未來となつたら方角なしの眞つ暗がり、それを引受けるといふ親より外にはたのみはござりませんと行つて貰ひたい。ごうちや、と云つたら、行ける行けるの世話いらず、参る参るの世話いらず、墮ちる墮ちんの世話いらず、受持手の親がまします。十劫此方我にまかせよ、我たのめと喚び通しの親をのけたこの勿體なさはよ、と行け。生々世々の初事に、今日は、我にまかせよ、我たのめ、其御勅命がおぞい心に届いてお呉れた。

地獄極
いでしよ

然らば心の落着はごうする、後生助け給へと彌陀をたのんだ。助けて離れはせん程に、墮ちたら此彌陀も共に焰の中迄も命愈けでも引受けてやる親の親切が聞

こえたら、地獄、極樂、どうでもよし、久遠劫來より、私一人を助ける事にかゝりはてた、大悲の親と二人連なら、これ程丈夫はござりませぬ。彌陀をたのんだ安心ぢやぞ。

餘り長くなるで此處でやめておく。